様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３３１６

研究課題名（和文）授業研究における授業記録のエビデンスとしてのあり方に関する日独比較研究

研究課題名（英文）Comparative Japanese-German Study of Lesson Records as Evidence in Lesson Studies

研究代表者
松田　充（Mitsuru, Matsuda）

兵庫教育大学・その他部局等・講師

研究者番号：８０８４５９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、（１）授業を解釈、再構成するための研究方法論の精査と開発に取り組むというドイツにおける授業研究の現代的な特質、（２）授業研究における質的な研究方法論は一般教授学が提起してきた授業づくりや授業構成に関する規範性を批判的に省察する役割を果たしているという一般教授学と授業研究の現代的な関係、（３）授業研究に関するデジタルアーカイブの設置動向と、主に教師教育におけるそのアーカイブの活用方法を明らかにした。以上の三点を通して、授業記録は教育研究のエビデンスとしてだけではなく、授業記録を用いた教育研究や教育実践の探究がなされており、多様な教育的な可能性があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日独比較を視点に、授業記録を中心として授業研究のあり方に関する研究に取り組んだ成果を、学会での研究発表、学術論文の執筆、書籍の刊行を行うことができた点に、学術的意義と社会的な意義がある。また本研究によって得られた授業記録の作成方法や教育的可能性が、授業研究に関するデジタルアーカイブを構想するための理論的な基盤となり、授業研究アーカイブの設置に向かう素地を形成した点にも、本研究の学術的、社会的な意義が存在している。

研究成果の概要（英文）：In this study, I identified (1) the contemporary characteristics of German research on teaching and learning, in which the research methodologies for interpreting and reconstructing teaching and learning are scrutinized and developed, (2) the role of qualitative research methodologies in teaching and learning as a critical reflection on the norms of classroom design and organization proposed by general didactics, and (3) the trend toward the establishment of digital archives on teaching and learning, and the ways in which these archives are used mainly in teacher education. (3) Through these studies, I have revealed that lesson records are not only used as evidence for educational research, but also have diverse educational possibilities, as educational research and educational practices are explored using lesson records.

研究分野：教育方法学

キーワード：授業研究　授業記録　アーカイブ　教授学　ドイツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学校での授業を対象とした研究は、わが国において「授業研究」と呼ばれ、伝統的に授業の改善と教師の専門性の向上を志向した実践的な研究として発展してきた。授業研究は、2000 年頃から教師教育の文脈で、その実践的な意義に注目が集まり、世界授業研究学会の設立とともに、”Lesson Study”という名称で世界的な広まりを見せている。そのような広まりの一方で、授業研究において何をエビデンスとし、それをいかに分析するのかという授業研究における実証性、科学性の問題が、授業研究の焦眉の課題となっている。というのも、近年の教育学研究の領域においては、その妥当性や実証性をいかに検証するのかが課題となっており、「エビデンスに基づく」教育研究が要求されている。授業研究においてこの課題は、授業記録をはじめとした研究エビデンスのあり方とその分析方法の問題として具体化されてきているのである。

このような課題に対して、実証性を重んじる経験科学の立場から授業研究を発展させてきたのが、ドイツの授業研究をめぐる議論である。現在ドイツでは「PISA ショック」を契機とした教育研究の「実証的転回」の中で、実証的な授業研究がその趨勢にある。そこでの議論の重点は授業研究の科学性と実証性にあり、具体的には、分析に用いる研究方法論の妥当性および、分析のエビデンスとして授業記録を用いるための作成、公開、蓄積の仕方が議論されている。

２．研究の目的

本研究の目的は、授業研究における授業記録のエビデンスとしてのあり方を、日独の授業記録の機能や役割を比較的に検討することによって明らかにすることである。つまり、本研究では、実証性を重んじる経験科学的アプローチから授業研究を発展させてきたドイツの授業研究を手がかりに、授業研究のエビデンスとなる授業記録がどのように作成、分析、そして蓄積されているのかを、日本のそれと比較することで、授業研究における授業記録のあり方を明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、以下の二つの方法をとった。

（１）文献研究をもとに、ドイツにおける授業研究の歴史的な展開についての調査

ドイツにおける教授学研究は、わが国においてこれまで頻繁に研究対象となってきたが、授業研究に関しては、ほとんど取り上げられてこなかった。本研究では、ドイツにおける授業研究の歴史的な発展の調査を主に文献に基づきながら検討した。とりわけ、研究の対象とした文献は以下のものである。

・Dohmen, G., Maurer, F., Popp, W.(Hrsg.) (1972) : *Unterrichtsforschung und didaktische Theorie*. R. Piter & Co. Verlag, München.

・Ingenkamps, K., Parey, E. (Hrsg.) (1970) : *Handbuch der Unterrichtsforschung. Teil I.* Beltz, Weinheim.

・Terhart, E.(1995): Unterrichtsfoschung. Einflüsse, Entwicklungen, Probleme. In: Hopmann, S., Riquarts, K.(Hrsg.): *Didaktik und/oder Curriculum. Grundprobleme einer international vergleichenden Didaktik. Zeitschrift für Pädagogik*. Beiheft 33, S. 197-208.

・Terhart, E.(1978): *Interpretative Unterrichtsforschung. Kritische Rekonstruktion und Analyse konkurrierender Forschungsprogramme der Unterrichtswissenschaft*. Klett-Cotta, Stuttgart.

・Walter, H.(1977): *Einführung in die Unterrichtsforschung. Methodologische, methodische und inhaltische Probleme*. Wissensachftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.

（２）文献研究ならびに訪問調査による現代のドイツにおける授業研究の動向の整理

本研究では、現代のドイツにおいて授業研究がどのように取り組まれているのかを、主に研究方法論に焦点を当てて、整理することに取り組んだ。そのために、主に以下の文献を参照しながら、授業研究を概観するとともに、ライプツィヒ大学、フレンスブルク大学を訪問し、そこにおいて取り組まれている授業研究の方法論について調査を行った。

・Rabenstein, K., Proske, M. (Hrsg.) (2018) : *Kompendium Qualitative Unterrichtsforschung. Unterricht beobachten – beschreiben – rekonstruieren.* Klinkhardt, Bad Heilbrunn.

・Meseth, W., Proske, M., Radtke, F.-O. (Hrsg.) (2011) : *Unterrichtstheorien in Forschung und Lehre.* Klinkhardt, Bad Heilbrunn.

・Terhart, E. (2014): Unterrichtstheorie. Einführung in den Thementeil. In : *Zeitschrift für Pädagaogik.* Jg. 60, H. 6.

・Geier, T., Pollmanns, M. (Hrsg.) (2016): *Was ist Unterricht? Zur Konstitution einer pädagogischen Form.* Springer VS, Wiesbaden.

・Gruschka, A. (2005): *Auf dem Weg zu einer Theorie des Unterrichtens. Die*

widersprüchliche Einheit von Erziehung, Didaktik und Bildung in der allgemeinbildenden Schule. Vorstudie. Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main.

（3）ドイツにおける授業研究アーカイブについてのインターネット調査と訪問調査

近年、ドイツにおいて設置が相次いでいる授業記録を保存・公開するための授業研究アーカイブについて、その全体像を主にインターネットによって調査したうえで、特にフランクフルト大学の Archiv für pädagogische Kasuistik とカッセル大学の Online Fallarchiv を訪問し、設立の経緯、授業記録の収集方法、アーカイブの運営体制、授業記録の活用法などについてインタビューを行った。

４．研究成果

本研究の成果は、以下の三点にまとめられる。

（1）ドイツにおける授業研究の現代的特質

ドイツにおける授業研究は、実践的な意義を強調する日本の授業研究とは異なり、まさに学術研究としてあり方が強調されてきた。「授業研究」という研究が自覚された 1960-70 年代においては、アメリカの教育研究の影響を強く受け、授業の成果要因を解明することに力点を置く、量的な研究が主流にあった。対して 1990 年代から 2000 年代に、授業研究の中で質的な研究が台頭し、現在では、談話分析や客観的解釈学といった質的な研究手法を用いた授業研究が主流となっている。ただし、授業記録を用いて授業を解釈、再構成しようという研究の系譜は、実は 1970 年代より、僅かながらも存在していた。ただし、そこにおいては、授業研究の研究方法論への自覚がなされていなかった。それゆえ、ドイツにおける授業研究の現代的な特質は、授業を解釈、再構成するための研究方法論の精査と開発にあるということを明らかにした。

（2）一般教授学と授業研究の現代的な関係

質的な授業研究が取り組まれる中で問題となっているのが、これまでドイツにおいて授業づくりや授業分析に関わる領域の中心にあった一般教授学と授業研究とがいかなる関係にあるのか、という問題である。量的な授業研究と一般教授学との関係は、相補的な関係として理解されていた。つまり、一般教授学に欠如している実証性を補うものが授業研究であり、逆に学術的な志向性の強い授業研究に対して規範的な次元で問題を定立する一般教授学である、という関係であった。対して、質的な授業研究と一般教授学は、このような相補的な関係というよりはむしろ、「省察的な関係」として位置づけられる。すなわち、一般教授学が提起する授業づくりや授業構成に関する規範性に対して質的な研究を用いて批判的に検討する、という関係性である。

（3）授業研究アーカイブの設置と活用

質的な授業研究に取り組むためには、発話記録や授業ビデオなどの授業記録が必要となる。授業研究で得られた授業記録を保存するための授業研究アーカイブについて調査し、アーカイブの設置数、アーカイブに保存されている記録種や資金援助の方法、運営体制などをまとめた。そのうえで、大学の教職課程における授業記録を用いた教師教育実践を取り上げることで、授業研究アーカイブが単に研究のためだけに用いられているのではなく、実践的な役割を有していることを明らかにした。

これらの成果から、授業記録は教育研究のエビデンスとしてだけではなく、授業記録を用いた教育研究や教育実践の探究がなされており、多様な教育的な可能性があることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Nariakira Yoshida, Mitsuru Matsuda, Yuichi Miyamoto	４．巻 10
２．論文標題 Intercultural collaborative lesson study between Japan and Germany	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal for Lesson and Learning Studies	６．最初と最後の頁 245-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/IJLLS-07-2020-0045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田充	４．巻 67
２．論文標題 ドイツにおける授業研究アーカイブを活用した教師教育実践に関する研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM版）	６．最初と最後の頁 483-494
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮本勇一・松田充・安藤和久・藤原由佳・阿蘇真早子・金原遼・三戸部由幸・澤田百花・藤井翔太・明月・吉田成章	４．巻 3
２．論文標題 授業研究の日独共同比較研究―広島大学教育方法学研究室・ライプツィヒ大学一般教授学講座間の共同研究報告書―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科教育方法学研究室編『教育方法学研究室紀要』	６．最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松田充	４．巻 1
２．論文標題 ドイツにおける教授学研究の展開―規範的モデルから実証的アプローチ―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究	６．最初と最後の頁 194-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松田充	4．巻 68
2．論文標題 ドイツにおける実証的な授業研究の今日的動向	5．発行年 2019年
3．雑誌名 広島大学大学院教育研究科紀要第三部（教育人間科学関係領域）	6．最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松田充	4．巻 65
2．論文標題 ドイツにおける授業研究アーカイブの設立とその動向	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM 版）	6．最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Yuichi Miyamoto, Yuka Fujiwara, Kazuhisa Ando, Masako Aso, Yue Ming, Mitsuru Matsuda, Nariakira Yoshida
2．発表標題 The Landscape of Researches on Lesson Study: An attempt to develop online research database of LS
3．学会等名 WALS(The World Association of Lesson Studies) Conference 2021, Symposium “Teacher Educators’ Involvements in School-based Lesson Study: A Case of Japan“, Macau and Hongkong (Online)（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 松田充
2．発表標題 ドイツにおける授業研究アーカイブを活用した教師教育実践に関する研究
3．学会等名 中国四国教育学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 A.バルトルシャットの教授学的授業研究の批判的検討：授業研究の教師教育への応用可能性
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 教育実践における承認の問題：N.Rickenの「教育的行為としての承認」を手がかりに
３．学会等名 日本教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 教授学研究としての授業研究のあり方―「陶冶Bildung」の位置づけをめぐって―
３．学会等名 日本教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 授業研究における教授学の役割に関する一考察―「教授学的授業研究」を手がかりに―
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 ドイツにおける授業研究アーカイブに関する研究
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松田充
２．発表標題 教員養成における一般教授学－過去・現在・未来－
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松田 充	４．発行年 2023年
２．出版社 広島大学出版会	５．総ページ数 275
３．書名 批判理論による教授学の再構成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関